

館山支部だより Vol.134

<支部連絡窓口>
千葉県隊友会館山支部
事務局(代表)川村 巖
〒294-0032 館山市並名1357
Tel. 0470-22-0230



<自生の房州琵琶>
今年も枝もたわかに異常なほど
沢山の実を付けました。
<拙宅の裏庭から>

梅雨入りをま近かに控え 清々しい初夏の時節を迎えております。
「閑かさや岩にしみ入る蝉の声」、「目に青葉山ほととぎす初鰯」
江戸の俳人松尾芭蕉が、奥羽・北陸方面六百里に及ぶ旅路の中で歎んだ千数百句の中の一句で、俳句の心を解せぬ吾人の胸をも打つものがあります。ところが最近には真に自然に親しむことのできる環境が少なくなつたと思います。渓谷や自然林の中に無造作に捨てられたコーラの空缶やプラスチックゴミなどを目にするにつけ、環境保全・美化に対する公徳心の欠如が嘆かれてならないのです。 《川村 記》

支部の活動概要

<4・5月の活動実績>

- 4.18(土) 令和8年度県隊友会通常総会(千葉市内)
- 5.17(日) 令和8年度支部総会(館空会との合同行事)
- 5.27(水) 旧海軍落下傘部隊戦没者慰霊祭(安房神社)
- 5.30(土) 5月支部役員会(別法、コメセン)

<6・7月の活動予定>

- 6.7(日) 旧海軍館砲校戦没者慰霊祭(館砲校跡)
- 7.11(土) 県隊友会前期支部長会議(千葉)
- 8.1(土) 支部役員会(コメセン)

令和8年度館山支部総会行事から 5月17日(日) 夕日海岸昇鶴

支部総会は正会員21名出席のもと、前年度の事業報告・会計報告に続き今年度の事業計画の審議が行われました。
今まで度々強調してきましたが、館山支部が現在抱えている問題は、新入会員の減少とともに会員の高齢化ということに尽きると考えております。具体的には公益社団法人の旗を掲げる隊友会支部として“身体でご奉仕する活動”の実践が極めて困難な状況にある、ということに尽きると認識しております。この解決策として県隊友会のHP等を活用した“中正・公正な歴史認識の普及”に力を注ぐことも一法かと考えております。 《館山支部長》



<館山支部総会>



<両会合同懇親会> 写真・館空会提供

館空会・隊友会館山支部合同の懇親会には、両会のOB会員に加え 海自第21航空群司令以下各隊隊員代表9名の現役の皆さんが参加され、館山の現役自衛隊員と自衛隊出身者が一堂に会した懇親の宴が開かれました。
参加の皆さんから自己アピールを交えた現況報告など気薙々の雰囲気の中で行われ、今年創立50周年の節目を迎える館空会にとっても今後の発展の励みになったことでしょう。現役自衛隊員の皆さんとの年1回の希少な場・機会でもありますので、お互いに声をかけ合って来年もまたぜひご参加ください。 《川村 記》

レクイエム

4/26 佐々木京三会員ご逝去(海、享年93歳)

隊友会館山支部会員として長年のご理解ご協力ありがとうございました。
ご冥福をお祈り申し上げます。 合掌

<支部会員一同>

旧海軍落下傘部隊戦没者慰霊祭 5.27(水) 安房神社

今年も表記の慰霊祭が、かつての横須賀海軍特別陸戦隊(第1、第3特陸)99名の戦死者の氏名が刻まれた慰霊碑の前でしめやかに執り行われました。関係者の高齢化とともに参列者もめっきり少なくなりましたが、今回も陸自の空挺関係者で結成された全日本空挺同志会千葉県支部の7名の会員の皆さんが遠路を厭わず来館、慰霊祭に参列される姿が見られました。

空挺同志会の人達の足を安房神社へ運ばせたのは、かつて日米開戦劈頭の南方作戦にて陸・海軍部隊がそれぞれ行った空前の空挺降下作戦、その歴史的な偉業から芽生えた同胞意識、誼(よしみ)であり、落下傘部隊関係者としての絆(きずな)だと思ふのです。散華された英霊もさぞ安堵されたことと思ふます。来館された空挺同志会の皆さんの協賛に深く感謝申し上げる次第です。 《川村 記》

陸自空挺洋上降下訓練に見る旧海軍落下傘部隊の事故教訓

毎年夏になると保田海岸沖合で陸自第一空挺団の洋上降下訓練が行われる。本来、空挺降下は素早く陸上戦闘に移る上での最短ステップとして考えられたものであり、「洋上降下」は想定には無かつたのである。しかしながら四面を海に囲まれ、6,800個以上の大小の島々からなる我が国の地理的な条件等、近年の島嶼部への侵攻に備えた警戒監視や島嶼防衛、離島奪回、水陸機動団等の考え方が重視されるようになり、この中から「洋上降下」という考え方が生まれたものとみられる。

数年前、この洋上降下訓練取材した毎日新聞の記事に、「約350メートルの高度で飛来したCH-47ヘリコプターから数名の隊員が一斉に降下し、それぞれ海面直前で落下傘を身体から切り離して着水する様子が見られた」という箇所が目を見張らされた。すでに85年前のことになるが、この館山航空基地で突然1,500名からなる2個中隊の特別陸戦隊が編成され、約2か月間に及ぶ猛訓練が始められた。この訓練の中で「誤って海上に降下し、落下傘とともに水没・殉職するという予期しなかつた事故が発生している。この種の操法等に起因する事故の防止対策として講じられたのが、「水面上4~5m手前で素早く落下傘を切り離して着水すること」であった。この措置と現在の空挺団の洋上降下訓練(着水時の操作)との関係性について調べてみることにする。

海軍の落下傘降下事故状況とその教訓

かつての館山航空基地で行われた落下傘訓練に関する旧軍の記録資料はまったく残されていないが、横須賀航空基地で行われた秘密海軍大臣命令「1001号実験」の実験主任を務め、館山基地での練成訓練の教官、そして日米開戦後の降下作戦に中隊長として参戦した当時のS海軍大尉の戦後の著書「海軍落下傘部隊の栄光と苦難」の中にも記されている。

降下員の操作に起因する事故の防止策として、「(万一)水面に降下の恐れがある場合は、海(水)面上4~5mの高度で素早く傘体を切り離して着水すること」が厳命された。苦肉の策であったが、「水面上4~5mの感覚」を身体で覚えさせるための訓練教材として考案されたのが、現在、館砲校跡に残されている「飛行特技訓練水槽(プール)」と思われる。ただしこれが完成したのは、館山での急速練成訓練が行われた翌年のことである。昭和17年度の横須賀鎮守府戦時日誌(防衛研究所蔵)の施設整備の中に、「館砲校飛行特技基礎訓練施設、7月完工」とあることから断定しても良いであろう。

確証はないが、この海軍の事故の教訓が現在の陸自の空挺洋上降下訓練の中での操法等に生かされていると言えよう。

館山での落下傘部隊の練成・急速練成訓練は、「突然・忽然と発せられた出来事」だったのであろうか?

○館砲校の開校(S16.6)直後、落下傘要員養成に関する通達が出され、館砲校での基礎訓練、館山基地での降下訓練のシラバス等が示されている。同時に横須賀鎮守府参謀長から各鎮守府宛、教育要員の選抜に関する至急通達が出されている。教育要員の選抜が思うように進まず、参謀総長から催促の通達が出されている。

○7月初め頃、当面名簿の提出された要員でもって第1回飛行特技員(落下傘要員)養成講習が館砲校で始められている(人数不詳)
○その他、館山基地の木造兵舎(隊舎)の増設、航空本部での航空機の改造(降下員飛出口)等が平行して進められている。等々これらはすべて極秘裡に進められていたが、日米交渉の難航状況から時期が大幅に前倒しになったものと史料される。



<写真① 陸自習志野駐屯地の落下傘降下塔>
50mの高度から降下させ、降下中の姿勢、落下傘の操縦、着地動作の訓練等、航空機降下の前の地上での訓練の集大成としての訓練設備と言われる。

<筆者注>



<写真② 館砲校・飛行特技員訓練プール跡、佐野>
矢印の一角に鉄塔の土台として用いられたと思われる十数個のコンクリ・ブロック(1m立法)が残されている。鉄塔は高さ十数mと考えられ、陸自の降下塔と異なり「水面上4~5mの感覚」を身体で覚えさせることを目的としたものであろう。

<筆者注>